慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『シドニア・ フォン・ ボルケ』
Sub Title	Vulpius, Christian August : Sidonia von Borke
Author	Vulpius, Christian August(Borcke, Ayumi von) ボルケ, 亜弓 フォン
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.38 (2021. 3) ,p.54- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20210331-0054

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『シドニア・フォン・ボルケ』

クリスティアン・アウグスト・ヴルピウス
訳：フォン・ボルケ・亜弓
（慶應義塾大学大学院独文学専攻 後期博士課程）

ポンメルン公爵家の滅亡[1]が話題となるたびに、美しいシドニア・フォン・ボルケ嬢[2]の名も語られた。

魅力と美しさを備え、頭がよく雄弁なシドニアは、まるでアルカディアの羊飼いの少女のように田舎の領地で夢想に浸った少女時代を過ごした。[3]しかし、一人で過ごす内に自信と自意識が育ち、およそ身分不相応な誇りを抱くようになった。由緒ある古い貴族の家に生まれながらも、彼女はそれで満足してはいなかった。ただの貴婦人以上の地位を欲し、同等の身分の男性を愛そうとはしなかった。自らの美しさの価値を過信し、ずっと身分の高い光の君に心を捧げようとした。彼女の愛にふさわしいのは王子でなければならなかった。そして、実際に王子に愛を捧げることとなったのだ。

まさにこのような身勝手な意思を胸に、シドニアは幻想的な静かな野を

以下、注はすべて訳者による。

1) 最後のポンメルン公であるボギスラフ 14 世は 1637 年に死去。三十年戦争（1618-48）後、ポンメルン公国の領土はスウェーデンとブランデンブルクの間で分割され、公国は消滅した。Wisniewski, Roswitha: Geschichte der deutschen Literatur Pommerns: Vom Mittelalter bis zum Beginn des 21. Jahrhunderts. Berlin 2013, S. 59.

2) Sidonia von Borcke (1548?-1620). 名前は Sidonie Bork/Borke/Borck とも書かれる。出生年月は不明。

3) 牧人（女牧人）、樹木（木陰）、泉（小川）、芝生などは、ホメロス的理想郷アルカディアの構成要素である。E. R. クルツィウス『ヨーロッパ文学とラテン中世』南大路振一他訳、みすず書房、1971 年、269-75 頁参照。

後にし、騒々しい都会へと踏み出し、宮廷に入り、そこで計画どおりの役を演じた。狙われて彼女の魅力に降伏しない男はいなかった。彼女の才気の魅力的な個性に誰が抗えただろう。シドニアは才気と肉体的魅力をもって欲しいものを捕らえ、自分につなぎとめた。彼女が望んだとおり世継ぎの王子は彼女の虜になったのだった。

王子はシドニアの罠にはまり、彼女に恋こがれた。王子に向けられた眼差しは、好意的かと思えば命令的、脅すようかと思えば媚びるようで、シドニアは視線を自由自在に操った。王子は彼女の愛と心を求め、人生で一番の歓びを与えて欲しいと懇願した。しかし、シドニアの返答は次のようなものであった。

「そのようなことを私に告げるべきではございません。私もまた、そのようなことに耳を傾けるべきではございません。」

「何と？乙女よ、何ですって？しかしそなたこそ――」

「私が何かいたしましたか？」

「私を優しい、好意に満ちた目で――」

「そうとられたのですか？勘違いなさっただけです。」

「何と？勘違い？どういうことでしょう？」

「私が、自分に対する責務と王子様に対する責務を知っていることは、王子様もご存知のはずです。私は由緒ある家の者です。欠陥のある条件では愛せません。ああ、もしできたとしても、私は決して口にすることはございません。私の愛も心も将来の夫にしか捧げられません。王子様は私の夫になれますか？」

「なれます。」

「許しを得ることができるでしょうか？」

「なりたいのです。」

「私を誠に愛しておられるなら、証拠を示して下さいませ。本当は――申し上げるべきではございませんが――、実は時折自問せざるを得ないのです、もしや私は――」

「そなたが私に好意を抱いておられると？」

「王子様！」

「私を愛していらっしゃるのでは？」

「まあ！」
「そうなのですか？――そうだとおっしゃって下さい、美しいシドニアよ。そして私を幸福にして下さい、高貴な乙女よ。」
「ああ！そう申し上げたいとしても、王子様、私たちは愛し合ってはなりません。王子様のお父上とお母上が――。もう私たちはお会いしてはなりません。私は領地の静かな野に戻ろうと存じます。そして、私の愛する小さな森の木陰を散策し、夢想に身を委ねて――。ああ、でも時折王子様のことを考えずにはいられないでしょう。」
「シドニア！」
「そしてもし噂を耳にすれば――」
「私のもとからいなくならないでおくれ！」
「もし王子様が幸せなお妃をお連れしたと耳にすれば――」
「シドニア！お願いだ！そうではなく、そうではなく！」
「どうだとおっしゃるのです？そうなるではございませんか、なるべきなのです。――ご安心下さいませ、王子様。他に道はございません。」
「そうなるべきではないのだ！」
　シドニアは微笑んだ。そして、王子の瞳を親愛を込めて見つめ、片手を王子の手の上に置き、ため息をついた。
「ああ、王子様。私たちは出逢うべきではございませんでした。少なくともお互い気持ちを告げるべきでは。これからどうなるとおっしゃるのです？私は冷静さを失い、王子様は不幸になられるでしょう。――これ以上苦しまなくてすむように、では――ご機嫌よう。」

　彼女は王子のもとから去り、王子が後ろから呼ぶのに振り向きもしなかった。急いで居室に戻ってから馬に乗り、領地に帰ってしまった。――これは巧みに計算された行動であった。――王子は後を追いかけずにはいられなかった。――彼女は姿を消した。しかし、偶然が手伝い、彼女は見つかった。――

　シドニアは泉のほとりの樹齢百年の樫の木の下に身を横たえ、[4] 片方の腕で頭を支え、彼女の姿を映す銀の鏡のように澄んだ水面を覗いてい

た。[5] 王子はゆっくりと近づき、彼女を観察するために、そっと木陰に隠れた。シドニアは、起き上がるとリュートを取り出し、弾きながら歌い始めた。[6]

---

4) タールマンによると、通俗小説によっては、風景描写を完全に省くか、あるいは風景がまるで脚本の注釈のようにぞんざいに冒頭に置かれる。また、樫の木はゲルマン人の信仰の対象であったことから、ドイツのゴシック文学の中では恐怖の象徴あるいは不吉な出来事の前触れとして用いられる。Vgl. Thalmann, Marianne: Der Trivialroman des 18. Jahrhunderts und der romantische Roman: Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der Geheimbundmystik. Berlin 1923, S. 4 u. 26. 本作品においても、風景の描写はほとんど無いに等しく、泉と二本の木が言及されているに過ぎない。樹齢百年の樫の大木がたたずむ泉は、シドニアの田舎の小さな森と街の境界に位置していると思われる。泉は水の精霊が出没する場所であり、森はグリム童話でも日常を逸した場所である。

5) オウィディウス作『変身物語』のナルシスも、森の中の泉のほとりに身を横たえ、銀色に輝く水面に映った自分の姿を見て過ごす。自己の美しさへの過信と、美しい外見の内に秘めた冷たさでナルシスが言い寄る者全員を拒絶した点も、同身分の求婚者を拒絶するシドニアと相似する。Vgl. Ovid: Metamorphosen. Übers. von Hermann Breitenbach. Stuttgart 2011, S. 354ff.

6) 牧人（都市を離れた田舎で生活し、余暇があり、原始的な楽器を所持している者）による「木陰、柴原、泉のほとりでの詩作」は、ヘレニズム時代からの詩的モティーフ。クルツィウス、前掲書、272 頁参照。また、「水辺で歌う女」の原形はセイレーンにあり、竪琴、歌、笛で航海者を誘惑する。アポロドーロス『ギリシャ神話』高津春繁訳、岩波文庫、2000 年、205 頁参照。小黒は、ヴェルターもまた男女の出逢いの場としての泉の魔力について語っていることを指摘している。小黒康正『水の女――トポスへの航路』九州大学出版会、2012 年、42 頁。「このあたりには人の心をまどわす精霊が漂っているのか、それともぼくの胸の中のあたたかなすばらしい空想力のせいなのか、それはわからないが、周囲のいっさいがまるで楽園のように見える。町を出たすぐのところに泉が一つある。ぼくはまるでメルジーネ［泉のほとりに出没する下半身が蛇の水の精］とその姉妹たちみたいに、この泉にひどくひきつけられているんだ。［…］遠い祖先の人たちは、みんな泉のほとりで知り合いになったり結婚を申し込んだりしたものなんだ。そうして、噴井や泉のまわりには恵み深い精霊がすんでいたんだね。」ゲーテ『若きウェルテルの悩み』高橋義孝訳、新潮文庫、1985 年 9 頁引用。

おお、我が心よ、如何(いかん)せん
胸の内何ゆえ怒(いか)る
この高鳴り、この震え
おお、我が心よ、何をか欠ける

ここでシドニアは一度リュートを傍らに置き、ため息をついてから再びリュートを手にし、歌を続けた。

何をか歓ばん
森の笑みは尽きねども
大地の懐(ふところ)に抱(いだ)かれつつ
苦難の餌食となるか

野は緑にあらずや
花々芳しからずや
慣れならひし歓びの
見つくる跡や見えざりし

我が耳を楽しませし
小鳥ども飛び去りて
ありし日の甘き楽しみ
愛(いと)しきことの今は無き

かの白金(しろがね)の泉の
小石の上をせせらぐは
柔らかき涼しき音色
若々しき我が心の如し

すべてはありしまま
されど心はここにぞあらね

花の絨毯の上なるは
我が身あらずして

心はあなたに置きしまま
思ひし方(かた)より逃げ来たり
おお！何ぞ愛せでいられんや
心何処(いずこ)にあらんとも

「君の心はここにあろう！」と、王子は叫び、木陰から現れた。
驚いた様子でシドニアははね起き、責めた。
「盗み聞きは、礼にかなった行いでしょうか？」
「幸福な言葉を耳にするのは何と甘い楽しみよ、たとえ盗み聞きであろうと。」
「私がなぜ満たされていないかをお聞きになって、幸福になられたのですか？それで私が満足できましょうか？私を孤独と悲しみの内にそうっとしておいて下さいませ。――ああ、何か追いかけられる羽目になるようなことを私がしたのでしょうか？」[7)]
「おお、シドニア！追いかけないわけにはいかなかったのです、君がどこへ行こうと。」
「なりません、王子様。お父上もお母上も奥方様も、お許しにならないでしょう。」
「奥方？――奥方だって？――お手を、シドニア。私の妻となるのが誰か教えよう。」
「え？――もしや？」
「そうだ。」
「私は――」

---

7) 以下のやりとりは、マインホルト作『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』においては森の中の胡桃の木の下で行われ、シドニアは教会での密かな挙式に賛同する。Meinhold, Wilhelm: Gesammelte Schriften. Band 5. Leipzig 1848, S. 225ff.

「君だ、君が私の妻だ！妻となるために、ついて参れ。」
「どこへ？」
「教会に。」
「何ですって？」
「牧師に教会を開けさせよう、命令だ。そして祝福の言葉を唱え、君を私に授けてもらうのだ。君を。君なしでは生きていけない。君が私のものにならないなら、私は死んでしまうだろう。」
「まあ、王子様！私がそのように軽々しいとお考えなのですね！誤解なさっているようです。——王子様は不幸になってはなりません。そして私も不幸になるのは嫌でございます。」
「不幸だって？私と一緒になって——不幸だと？」
「不幸になり、人に責められることでしょう。王子様のお父上とお母上がご参列なさらないのでしたら、私は教会には参ることはできません。」
「おお、シドニア！君は何て残酷なのだ！」
「私は道理にかなったことを述べているに過ぎません。」
「君は私を愛していないのだね。」
「そうかも知れません。」
——と言い、シドニアは身体をそむけて小さなハンカチに顔を埋めた。シドニアがしゃくりをあげるのを聞き、王子は動転して彼女を固く抱きしめ、叫んだ。
「君は私のものだ！私のものだ！そして私は君のものだ、永遠に！」
　シドニアは、密着した頬と頬に燃えるような熱を感じたが、勇気を振り絞って身体を離し、向き直って言った。
「王子様はたしなみの涙を尊重するすべをご存じないのでしょうか。」
「シドニア！」
「私が何者であるかをお忘れになってしまうとは！王子様！私の心は王子様を許してしまいますが、それもこれで最後です。私自身はこのような危険なお遊びに付き合うことはできません。お父上のお許しを得られないのであれば、もう二度と私をお訪ね下さいますな。——誠に私を愛しておられるのであれば、私を尊重して下さいましょう。私がもし違う態度をとっていれば、それもおできになれなくなるところでした。——私を孤独の内

にそうっとしておいて下さらないならば、どこか遠い国に行くか、あるいは修道院に入らざるを得ません。」
「修道院に入って幸せになれるのか？」
「いいえ。」
「だが、私とはともに幸せになれるではないか！」
「王子様！――私がどう考えているかはご存知のはずです。私の貞操と愛をご尊重下さいませ。――修道院では王子様と王子様の奥方様とお子様のためにお祈りを捧げましょう。そして――おお、もう私のもとをお去り下さいませ、王子様。」
「それはできぬ！」
「もうお別れです。――お幸せに！」
「シドニア！この指輪をもって君を妻としよう、愛の内に。そして私を君の夫としよう、希望の内に。今は去るとしよう、君の言葉に従って。追って便りを出そうぞ。」
「王子様！」
「シドニア？」
「この指輪をはめるわけにはまいりません。」
「よいのだ。はめておくれ。君は私の妻になるのだから。」
「おお！王子様！」
　シドニアは沈むように王子の腕の中に身を任せ、王子は彼女の身体の心地よい重みを抱きとめ、自分の胸に押しつけ、彼女の半ば開いた口に震える唇でそっと触れた。甘い息吹とともに彼女の魂が彼の内に流れ込んだ。王子は彼女の開いた唇をくちづけでふさぎ、この甘い磁石から身を離すことができず、美しいうっとりした瞳の中を覗き、「ああ、シドニア！」とだけやっと言えたのだった。が、シドニアの方は、「王子様！誓いはお守り下さいませ！」と、念を押した。――王子は言われるがまま誓った。
　狩人に目撃され、二人は道を別つ。長い間王子は去っていく人を見つめていたが、やがてため息をつきながら街へ戻った。自分の望みを両親に話したいと思いつつも勇気の無い王子は、自分の教育係でもあった宮廷説教師に相談した。しかし、諌められ、相談に乗ってもらえなかった。王子は、両親にどう伝えたものか発端を見つけることもできず、途方に暮れた。し

かし、噂が公爵夫妻の耳にも届き、全容が伝わった。
公爵は、自分が耳にした内容を息子に伝えた。そして落ち着いて付け加えた。
「そなたも妻をめとる年齢になり、望むところだと聞く。私が自ら選んで与えてやろう。そなたの結婚相手は王女でなければならぬ。シドニアとの交際は断たれよ。その関係が貴いものであれば、そなたを破滅に導くであろう。また、貴いものでなければ、何の役にも立たぬだろう。父としての私の意向を心得たなら、それに添うように。」
王子は雷に打たれたかのような衝撃を受けた。そして、異議を唱える勇気も無ければ、父君の返事をシドニアに伝える勇気も持ち合わせていなかった。王子は離宮に逃避し、悲嘆に沈んだ。
その間にも父公爵は王子のために大使を派遣し、花嫁にふさわしい王女を探させた。
このことが長く秘密のままでいるはずはなかった。噂はシドニアの耳にも入った。シドニアは、恋人が抵抗してくれると計算していたが、誤算だった。ついに彼女は手紙を持たせて使いを出した。懇ろに綴った悲嘆や不安や問いに対する返事は次のようなものであった。
「親愛なるシドニア、神は父母に従順であれと命令された。私のことは忘れて、君の愛を得るにふさわしい善き男を選ばれよ。」
シドニアは再度手紙をしたため、打ち明けたいことがあるので、最後にもう一度だけ話す機会を与えてくれるよう頼んだ。彼女の優しいが切迫した調子に、王子は抗うことができなかった。王子は彼女に約束し、指定された場所にやって来た。この泉のほとりの樫の木の下でかつて彼はシドニアに永遠の愛を誓ったのであった。
王子は戸惑いが隠せぬ様子で、口をつぐんだまま深いため息をつきながら彼女に近づいていった。シドニアは王子の手を取り、話した。
「王子様、私の申し上げたとおりになりませんでしたか。――こうなることはわかっておりました。とは言え、突如断念されたことには少なからず驚きました。もう少し闘って下さるかと存じておりました。――されど、恨み言を述べるつもりはございません。王子様は息子として恭順なだけで、お父上とお母上への愛は私への愛より古いのですから、月日の浅いほうが

譲らなければなりません。私に約束して下さったことは忘れて、王子様を自由な身にして差しあげましょう。ここに指輪をお返しいたします。私は期待なぞしたくはございませんでしたが、王子様に強く請われて育ててしまった期待を、この指輪はさまざまに思い起こさせるでしょうから。難しくとも、諦めねばなりません。必然は強力な命令者です。――これにてお別れしたことになります。王子様は婚礼式の祭壇へ、私は修道院へ参りましょう。私が殿方を愛することはもうございません。誠の愛は一生に一度のものです。一度与えてしまったら、取り返すことはできぬものです。されば王子様もお妃と結婚されても、お妃が王子様の心と愛を受け取ることはできぬと私は信じております。」

王子は彫像のように無言で彼女の前に立ち尽くしていた。彼は額の汗を拭った。その日は蒸し暑かった。――シドニアは杯を取り出し泉から水を酌むと、それに少量のワインを注いだ。[8] 愛想良く渡されたその飲料を王子は飲み干した。すると、シドニアは言った。

「お行きなされ。あてがわれたお妃とできる限り良い人生をお送りなされ。私への誓いを破られた王子様は、私同様、子を持たぬままお亡くなりになることでしょう。神のご加護がございますように。」

そして、彼女は急いで森へ入って行った。王子は困惑しながら馬に跨がり、街へと駆った。

間もなく王子は妃をめとり、シドニアは修道女としてマリーエンフリース修道院に入った。

ここで彼女は 80 才の時に魔女の嫌疑で調査されるまで過ごした。世継ぎが無いまま王子は既に亡くなっていた。

ヴォルデという名のジプシー女がシドニアの信頼を勝ち取り、シドニアのために情報を収集し、腹心となり、シドニアを含め未来のとばりを除きたいという者のために未来を占った。ヴォルデは勝手知ったる様子でシド

---

8) ギリシャ神話では、ケラソスが葡萄酒にアケローオス川の水を混ぜている。アケローオス（アケローオス川の神）とムーサ（学芸女神）の娘は、セイレーンである。ヒューギーヌス『ギリシャ神話集』松田治・青山照男訳、講談社学術文庫、2018 年、184 および 323 頁参照。

ニアのもとへ出入りし、いつしかなくてはならない存在となり、非常に満足していた。

ところが、他の修道女たちは反対に、不満が大きくなっていった。彼女たちはシドニアよりずっと若く、人生の歓びと楽しみに満ち、不安や憂慮に無縁だった。人生を謳歌しようとするその様子にしかし、気難しいシドニアは嫌悪を抱いた。シドニアは彼女たちにお節介を焼いたので、扇動、諍いが起こり、声高な訴えがポンメルン公爵家の宮廷に及んだ。大抵は訴訟に慣れているシドニアが勝ったので、若い修道女たちの憤懣は大きくなっていった。ついにシドニアは、修道院から追放すると脅された。そのほうが幸せであったろう、それにより死を免れたであろうから。シドニアは、躊躇なく女子修道院長よりも高い権威を行使して食堂を占拠し、誰もシドニアの許可なく入室できなくした。そこでシドニアの仇敵たちは、シドニアが悪魔を隠し持っているからだ、と主張した。それに対してシドニアは、彼女たちを見下して「職人風情の娘たち」と呼び、自らは「お城育ちの乙女」を自称した。ところで、彼女は修道女一人一人にあだ名を付け、彼女たちのすることを逐一悪く解釈した。訴えと申し立てが止む様子は無く、懲罰も終わることは無く、災いはひどくなる一方だった。修道女たちは、「あの年老いた魔女にこれ以上長く苦しめられるのはうんざり！シドニアは、悪魔を持ち呪術を行使しているから、火炙りの刑に処されるべきよ！」と、声を大きくした。――判決は下されたのだった。誰もがとっくに彼女を疑っていた。修道女たちは、シドニアの犯した罪よりもシドニア自身を憎んでいた。シドニアは排除されなければならなかった。シドニアの自惚れは我慢ならなかった。彼女は宮廷の奉公人を「ごろつき」、「ろくでなしの犬」、「文書屋」などと呼び、従弟のヨースト・フォン・ボルケを横領の廉で訴え、あるいは修道院長のエッガート・シュパーリンクには公爵を騙した嫌疑をかけた。シドニアの死ぬ運命はすでに決まったようなものだった。なぜなら信じられないことに、この二人は最初に異端審問官、次に刑事裁判の陪席となり、修道女たちは証人となったのだ。さらに特筆すべきは、農場を横取りしたヨースト・フォン・ボルケに対してこの時すでにシドニアが訴訟を起こしていたという点である。遺言によりシドニアはこの農場から生活費を得るはずだったのだ。

この時代、ポンメルン公国では魔女裁判が盛んに行われていた。シドニアは、愚かにも公共の場で魔女たちの犠牲を嘆くばかりか、火刑を宣告された者一人一人に死装束を贈っていた。そのような行為は疑惑の念を起こさせた。魔女に対してそれほどまでにも同情するのは仲間だからで、シドニア自身も魔女なのだ、と。

まずシドニアと交流のあったジプシー女ヴォルデが逮捕された。ヴォルデは魔女であることを否定したが、拷問にかけられると、求められたとおりを認め、シドニアも一緒に呪術を行使したことや、ヒムという名の悪魔を飼っていると誣告した。

シドニアは裁判所への出廷を求められた。彼女は、「仇敵ヨーストの顔を見るのも嫌だ」と抵抗したが、出頭しなければならなかった。ヨーストは謝罪したが、シドニアは遠慮なく「ヨーストは親戚の絆をずたずたに裂き、私の父の領地を横取りした上、私への生活費の支払いを滞らせている。」と、訴えた。それに対しては回答が与えられなかった。検察官により公爵の命令が提示され、審問が始まり、シドニアはヴォルデと対決させられた。ヴォルデは、「自分の供述は、死んでも撤回しない。」と、シドニアに面と向かって述べた。このような厚かましさにシドニアは驚いた。彼女の内にさまざまな激情が巡った。彼女はヴォルデと検察官と従弟を罵倒し、罵りながら部屋へ戻って行った。

審理が開始され、進められた。修道女たちが尋問を受け、全員シドニアに不利な証言をし、魔女である嫌疑を強めさせた。それでシドニアはより厳しく拘束された。最初は見張りをつけられ、1619 年 11 月 22 日にエーデルブルクの牢へ入れられた。[9] シドニアの部屋が取り調べられたが、怪しい物は何も無く、精選された祈禱書が見つかっただけだった。[10]

その 3 週間前にヴォルデが魔女として火炙りにされたので、シドニアが

---

9) 魔女は、術を使って脱出しないよう狭い部屋に閉じ込められた。浜本隆志『魔女とカルトのドイツ史』講談社、2004 年、95 頁参照。なお、Oderburg は文中 Oederburg と表記されている。

10) 異端審問および魔女裁判の容疑者の逮捕、投獄と同時に管財役人と公証人が被告の家宅を捜査し、財産が没収された。これは「新しい錬金術」とも呼ばれた。森島恒雄『魔女狩り』岩波新書、1970 年、99 および 161-64 頁参照。

魔女の仲間であるという供述はそのままになった。

シドニアに対してはさまざまな訴えが申し立てられた。人を呪術で殺した、魔法をかけた、病気にした、不随にした、と。なかんずく公爵の崩御に大喜びしたとも訴えられた。

シドニアの望みどおり弁護士が与えられた。パウリ博士は腕のよい法律家だった。彼はできる限りのことをし、罪のないシドニアを愚蒙と悪意の魔手から救い出そうとしたが、人の先入観を失わせることはできず、ましてやシドニアを死に至らしめるための工作を打破することはできなかった。

調書がマクデブルクの参審人団に送られた結果、拷問が科された。この不運な齢 80 才の老女は、拷問室に連れていかれ、服を脱がされ、拷問台に寝かされた。―― そして、求められているとおりを供述した。

シドニアのためにとりなしが試みられたが、無駄に終わった。彼女は死ぬことを望み、それは与えられた。シドニアは、1620 年の秋にシュテッティンのミューレントールの前で斬首されてから火刑に処された。[11)]

今でも一族のもとに、美しさの際立つ傑作とされるシドニアの肖像画が保管されている。1786 年の『ジュルナル・フォン・ウント・フュア・ドイチュラント』誌には、その絵をもとにした銅版画が印刷されたが、奇妙なことにシドニアの後ろにジプシーのヴォルデがたたずんでいる。[12)]

レンチュは、『ブランデンブルギシェル・ツェーデルハイン』[13)] の 115

---

11) 火刑は極刑、絞首刑はやや軽い刑で、剣による斬首は「慈悲」ある刑であった。浜本、前掲書、101 頁参照。

12) Bibra, Philipp Anton Sigmund Freyherrn von: Journal von und für Deutschland, Dritter Jahrgang. Eilftes Stück. Frankfurt a. M. 1786, S. 376 の図（本稿図 1）。ヴルピウスは図中の人物をヴォルデとシドニアとしているが、同誌では、ボギスラフ 14 世の命により宮廷絵師が、80 才のシドニアとともに 20 才頃のシドニアの複数の肖像画を参考に若かりし日のシドニアを同じ絵の中に描いた、としている。また、背景の城はシュタガート近郊のザーツィヒ城で、シドニアが監禁されていた丸い塔と拷問に使われた梯子が描かれている、と注釈している。Vgl. ebd., S. 378.

13) Rentsch, Johann Wolfgang: Brandenburigscher Ceder-Hein, worinnen des

頁で、「ポンメルン家にはまだ 7 人の公爵が生きており、その内 5 人は結婚もしていた。2 人は若くして亡くなり、残りの 5 人も子の無いまま亡くなったのは、神のみが定めたことであった。ポンメルンとマルクでは、シドニア・フォン・B.[14] という名の貴族の乙女が 7 人全員に呪術をかけたが、呪術を解くことはできなかったので、判決と法をもって処刑された、という噂が絶えない。しかし、これを事実と受け取ることに人々は正当なためらいを感じている。」と、述べている。—— レンチュのこの本は、シドニアの処刑から 60 年後に出版されたものである。

Durchleuchtigsten Hauses Brandenburg Aufwachs- und Abstammung, auch Helden-Geschichte und Gros-Thaten, aus denen Archiven und Ur-Brifschaften, auch andern bewerten Documenten mit Fleiß zusammen getragen und neben zirlichen Kupfer-Bildnißen vorgestellet worden. Bareut 1682.

14) ヴルピウスは、Sidonia von B(ork) と記載しているが、翻訳する際には、レンチュが採用していた表記にならった。Vgl. ebd., S. 115. なお、レンチュが B. という表記を採用した背景については、デーネルトが次のように述べている。「伝記作家達は由緒ある家系に遠慮して、シドニアの氏名をフルネームでは記載しなかった。」Dähnert, Johann Carl: Pommersche Bibliothek, vierter Band. Greifswald 1755, S. 235.

図 1　J. P. ガンツ作の銅版画。
ポンメルン博物館資料（Archiv Pommersches Landesmuseum）

図 2　図 1 の原画とされる肖像画。1945 年消失。（油彩・板、65 × 42cm）
グライフスヴァルト資料館（Landesarchiv Greifswald Rep. 38d Borcke Nr. 106 d6）

C. A. ヴルピウス『シドニア・フォン・ボルケ』訳者解題

フォン・ボルケ・亜弓

本稿は、ゲーテの義兄クリスティアン・アウグスト・ヴルピウス（1762-1827）の小作品集『注目すべき名高い女性たちのパンテオン』（1812）の第3部に収められた『シドニア・フォン・ボルケ』の翻訳である。1809年から1816年の間に出版された5部から成る原典には、実在の女性たちを紹介する逸話が収められている。

ヴルピウスは、ワイマールの官房書記であった父の早世後、妹たち（その内の一人は、後のクリスティアーネ・フォン・ゲーテ）を養うために法律の勉強を断念し、ゲーテの後援でワイマールにて出版者の秘書や宮廷劇場の台本作者兼脚色者を勤める傍ら、年に5、6本の小説を執筆する人気作家でもあった。[1] 本国ドイツでは作品が今日でも出版されているが、それらの和訳は見当たらない。本稿は、ヴルピウスに注目し、のちに文学および美術作品が生まれる契機の一端となったと思われるこの作品を紹介することを目的とする。

ナショナリズムの高揚とともに祖国への愛や関心が高まったドイツでは、18世紀末からは特に「往時」の時代設定の歴史小説が好まれたが、[2] ポンメルンにおいても自国への熱狂が高まり、1820年代から歴史的創作文学の最盛期を見、歴史小説、悲劇、叙事詩、物語が数多く書かれた。[3]

今から400年前に、修道女でありながら魔女として処刑されたシドニア・フォン・ボルケ（1548?-1620）の名前を初めて創作作品に登場させ

---

1) 亀井伸治『ドイツのゴシック小説』彩流社、2009年、116-17頁参照。
2) 英独両国の通俗小説の傾向として、「往時」（Vorzeit）あるいは「遙かな昔」（graue Vorzeit）とは、およそ1世紀から16世紀を指すことが多いが、1780年代からドイツゴシック文学の歴史小説の時代設定はドイツ史全体に広がり、なかんずく三十年戦争（1618-48）と七年戦争（1756-63）に集中した。同書、36-37頁参照。
3) Vgl. Wisniewski, Roswitha: Geschichte der deutschen Literatur Pommerns: Vom Mittelalter bis zum Beginn des 21. Jahrhunderts. Berlin 2013, S. 224-25.

たのは、ドイツゴシック文学の一分野である盗賊小説の代表的作家、H. チョッケである。[4] そのチョッケに倣ってヴルピウスが執筆した盗賊小説『リナルド・リナルディーニ』[5]（1799）は、19 世紀の内にも少なくとも 35 の外国語版が出版され、[6]「義弟ゲーテのあらゆる成功を顔色なからしむるほど」[7] の人気を博していた。チョッケが、戯曲『女魔法使いシドニア』[8]（1798）において、歴史および伝承とは全く切り離してシドニアを作品に挿入したに過ぎないのに対し、ヴルピウスは、『シドニア・フォン・ボルケ』において、歴史と伝承と創作の融合を試みている。

1620 年の処刑後、「シドニアは、ポンメルン家一美しい公子と恋仲であったが、公子が隣国の公女と結婚したので逆恨みし、公爵家が断絶するよう呪いをかけた。」という噂が伝承され続け、年代記に歴史的事実と混在した形で記録されていった。ヴルピウス作『シドニア・フォン・ボルケ』では、冒頭の年代記調の説明文の後に作者の創作部分に入っていくが、そこに巧みにゴシック的要素を挿入した後、裁判記録を元に書かれた年代記からの引用で締める、という構成がとられている。C. B. ナウベルトが 18 世紀末には確立させていた歴史小説の手法では、実際の歴史上の出来事の中で架空の人物（主人公）の私生活が自由に描かれるのに対し、[9] シドニアを題材とする創作作品では、主人公シドニアは、「修道女から魔女へ」および「魔女裁判の後、火刑」という歴史的事実に沿わなければならな

---

4) Johann Heinrich Daniel Zschokke (1771-1848). マクデブルクの織物業者の家に生まれる。両親の早世後、22 才で執筆した小説『アベリーノ、大盗賊 (Abällino, der große Bandit)』は、瞬時にセンセーショナルな成功を収め、「盗賊小説」というジャンルを形成するに至った。亀井、前掲書、112 頁参照。
5) Vulpius, Christian August: Rinaldo Rinaldini. Leipzig 1799.
6) 亀井、前掲書、117 頁参照。
7) 同書、116 頁。
8) Zschokke, Johann Heinrich Daniel: Die Zauberinn Sidonia. Schauspiel in vier Aufzügen von Heinrich Zschokke. Berlin 1798.
9) Christiane Benedikte Eugenie Naubert (1756-1819). ライプツィヒ出身の女性作家で、18 世紀末における歴史小説の第一人者。ウォルター・スコットは、ナウベルトの「二層構造の歴史小説」（Zweischichten-roman）の構造を手本とした。Vgl. Wisniewski: a. a. O., S. 224-25.

い。さらに、実在したシドニアと伝承のシドニア像と作者の想像によるシドニア像の三つが、一人の人物として表されなければならない。このような制約を伴う創作に、ヴルピウスの後、1832 年から 1917 年の間に T. フォンターネを含む八人の作家が挑んだ。[10)]

ヴルピウスのシドニアは、野や森などの自然に親しみ、水の精と関係の深い泉との関連が示唆されるロマン主義的人物像を特徴とするが、1832 年に出版されたアルミニア作『シドニア・フォン・ボルク』[11)] においても、自然との近しい関係が強調され、シドニアは、自然の不思議な力を利用できる存在として描かれている。また、1847/48 年に出版された J. W. マインホルト作『修道院の魔女シドニア・フォン・ボルケ』[12)] は、オスカー・ワイルドの母親が英訳したことにより英国にて広く読まれるところとなり、[13)] シドニアを題材とする一連の作品の代表作となるが、ヴルピウスの創作部分にあたる森での会話が踏襲されている。

なお、ヴルピウスは文末にてシドニアの肖像画が複数存在することに言及したが、後続する一連の作品には、荒涼とした景観が絵画のように詳述され、あるいは絵画の詳細な描写が含まれ、絵画との関係を特徴とするものが多い。さらに、ラファエル前派の作品を含むいくつもの肖像画が制作されたことを付け加えたい。[14)]

末筆ながら、翻訳にあたり助言を頂いた香田芳樹先生（慶應義塾大学）および入倉智志氏（立命館高校）、また引用本の参照にご助力くださった吉原素子氏（法政大学）にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

---

10) アルミニア、マインホルトの他 J. E. ベンノ、H. E. R. ベラーニ、A. E. ブラハフォーゲル、P. ヴェント、L. ハーマン。

11) Arminia［Haugwitz, Karoline Albertine Elenore Luise von］: Sidonia von Bork. In: Ders.: Das Dritte Dreiblatt, oder pommersche Geschichten. Leipzig 1832, S. 149-216.

12) Meinhold, Wilhelm: Sidonia von Bork die Klosterhexe, angebliche Vertilgerin des gesamten herzoglich-pommerschen Regentenhauses. Leipzig 1847/48.

13) Meinhold, Wilhelm: Sidonia, the Sorceress. The Supposed Destroyer of the Whole Reigning Ducal House of Pomerania. Trans. Lady Wilde. London 1849.

14) 代表作に、E. C. バーン＝ジョーンズ卿作『シドニア・フォン・ボルク』（1860 年、水彩・紙、33.3x17.1cm、テート・ギャラリー蔵）がある。